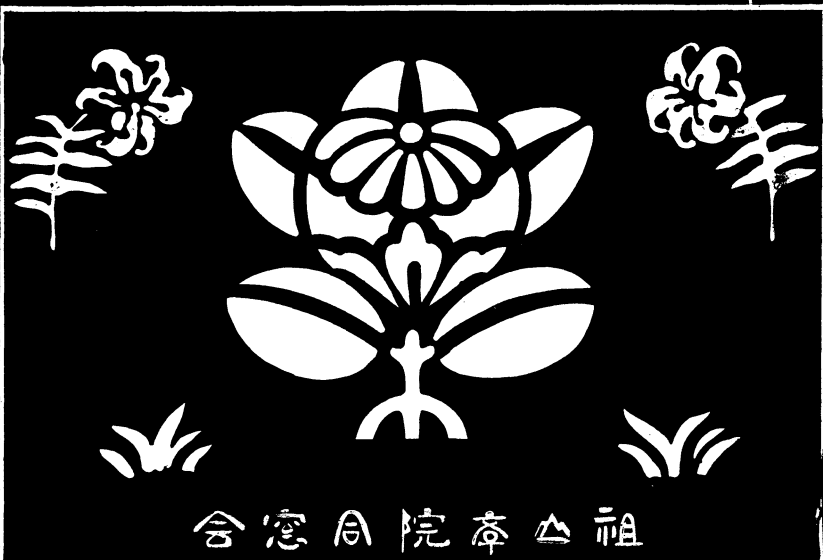




神 西



合憲同院奉△祖

號式第 卷壹第



次 目

<p>△題 言……………</p> <p>△慈悲の活用……………</p> <p>△奥山の影より……………</p> <p>△人格中心の研究法……………</p> <p>△救ひのみこゑ……………</p> <p>△椿の花……………</p> <p>△徵兵に出る友に與ふ……………</p> <p>△我が國旗……………</p> <p>△雪中の竹……………</p> <p>△吾人の目的……………</p> <p>△日記帳より……………</p> <p>△淋しい身延……………</p> <p>△雨後の秋……………</p> <p>△布教の心懸け……………</p> <p>△海……………</p> <p>△運命、銀世界……………</p> <p>△漢詩、和歌、俳句……………</p> <p>△同窓會々報……………</p>	<p>曉星洞主</p> <p>歸山</p> <p>白鳳</p> <p>△生</p> <p>山内戒生</p> <p>辻能學</p> <p>望月宗康</p> <p>市川是溫</p> <p>H 觀生</p> <p>岡 觀孝</p> <p>黒 觀孝</p> <p>友井能慈</p> <p>伊藤海聞</p> <p>荒木經明</p>
--	--



堂 本 山 延 身

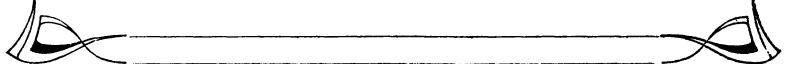


美 亞 山 水 畫



神 棲

誠に身延山の栖はちはやふる神も
恵を垂れ天下りましますらん。無_レ心
賤男賤女までも心を留めぬべし。畧_中
かゝる砌なれば庵の内には晝は終
日に一乗妙典の御法を論談し夜は
竟夜要文誦持の聲のみす。(身延山
御書ノ一節)



慈悲の活用

曉星洞主

一 法燈の下法華經を拜讀し讀み讀んで安樂行品の
 大悲の想を起し慈父の想を起し乃至大師の想を起すべ
 しの金言に到つて私は慈悲といひ善根といひ愛憐とい
 ひ同情といふ、總て此等は本來の至心、無垢清淨の感
 情即ち信仰の變現した所のものであると感した、而し
 て又幾分なりとも私共は經文及び御遺文の拜讀から直
 覺した所を實地の活用に現はしたいと云ふ感字を益々
 深うした、即ち私共はその作事が佛陀の聖意にかな
 ふ所のとでありたいのだ、金が出來てから初めて善根
 を積まうといふは大層なくれた遣方である、遅播の種
 の生いぬ果である、又慈悲のために使ふ所の金は資本
 ではない、若し相當の資本を下して取蒐らねば初めら
 れぬと考へたなら、此の如き慈悲善根の内部には一の
 光華を認むることが出來ず、所作佛事たる眞の手形を領
 することが出來ないのである、世間の所謂慈善事業が偽
 善事業となり易いも畢竟斯うした所から來るのである

二 私共は分限者でない、その代り何時も分限者同
 様の氣分になつてゐることが出來る、即ちころろがけ一
 つに依つて、私共は光榮ある貧賤の下に立派な生活を

營むことが出來る、同時にそのころろがけに依つては如
 何に富貴の人であつても、その富貴は全く汚辱の富貴
 となるのである、貧賤なりとも善を行ふ志だにあれば
 人を救ふと多しが夫である、アラビヤでは路傍の木を
 伐る者は手重い制裁を受けねばならぬと云ふ、即ち熱
 沙を踏んで迎る旅人へドレ程の愉快を與へるであらう
 かと自ら進んでその緑の木の一本でも保護する人があ
 つて、之に依つて旅人が心持善く休息することが出來た
 ならば、その翠の濃やかな蔭は全く此の保護者の涼し
 い心の蔭である、その優しい同情の力が一つの木に形
 を變へて現はれたのである、私共は常平生の不斷に於
 て屢々之に似た恵みと親切とを看出すことが出來る、善
 根と申すは大なるに依らず又小さきにも依らず（善尼
 御返）と知つて、土の餅一つにしても、皆是れ内部至心
 の溢れ即ち信力の變現した所の尊い活用であると深く
 感謝し且つ進んで又此の例を幾らも學ぶことが出來るの
 である。

三 僧なりとも俗なりとも、斯くせば佛陀の聖意に
 かなふであらうと信じて、一つの善根を志す時、夫が

當初は微々たる、根も葉も花もない、のみかは時には世間からその精神を誤解されるやうなと迄出來るとしても、夫が真心からの仕事であり、佛陀の慈悲の一端に觸るゝ以上には、遠からずして生命の樹となり、その根を深く地中に送り、その枝を八方に擴げると云ふ確信を有つてゐたいのである、而して相互は懷中に鏹一文の用意がなくとも宜しい、金は法界に散らされてある、到る處の同情者のポケットにある、自分の手許には銀行も金庫も債券も無い代り、何日でも自由に金を取出すとの出來る眞の黄金の鍵を握つてゐると云ふ確信がなければ駄目である。

四 慈悲の最初の出發点は信者銘々の家庭であつて夫から擴がつて終に同類に對する友愛の情となるのである。仍で宗教家が職業的に如何に慈悲に功德を説くとも、此の仕事の上に力を添へて呉れる所の信者があるので始めて成立つ譯である、外國の或る僧正が某貴族を尋ねて寄附を申込んだ時、貴族は僧正の詞を聞かうとはせず、うるさいと計りで一向取合ふ氣色のない所を、推して僧正が述立てたので、乱暴にもその貴族はビシヤリと僧正の頬に一打を與へたのである、スルと僧正は靜かに詞を續け「貴下、貴下は余に一ト打を

與へ給うた、然らば余の人民に同じく何か與へ給へ」と、斯して彼は柔和忍辱の鎧を着了せたのである。

五 慈悲善根の第一着手として、人世一代に於て幾度としか數へるとの出來ぬ吉凶の儀式に於て、此れは私共に取つて又となき好い機會であるから、私共は正當に此の機會を用ひたいのである、元より慈悲とは自ら進んで行ふ所のころがけであるから、特別に爾う改まつた考を以て金錢を費さずとも、私共は私共の内心に潜んでゐる想念を實際の上に現はすのが出來やう茲に今一つ文書傳道機關が組立てられ、僧俗銘々がその機會ある毎に經文、御遺文の一鈔乃至數鈔、高德の講話法談の類を四方に頒つとし、尙私共が年頭の場合集會の場合、旅行の場合、訪問の場合、土産の要る時乃至は葬儀の時、此等所有機會を活用したならば、私共は一の小さな文珠、觀世音、不休息、勇施、彌勒の諸菩薩となることが出來るであらう、私共は總ての信者を動かして法悅のお裾分を爲さしむべく心掛けねばならぬ、此して私共の心の中に「法」の殿堂を築くやうにして行きたいものである。



奥山の影より

歸山

里遠き奥山にも春の粧が顯れた。朴訥無文の野翁の吟線が鳴て來た。温熱催眠の光に浴しつゝ停て居た自分は何時か御艸庵を睜めてゐた。丈餘の雪に軒傾き壁落ち食盡きた延山の御隱栖、自分の胸は今張り裂ける程緊張して來た。何に依つてゝあらう。

不斷の時間と無限の變遷とが織り出した諸現象。

近く五十年を顧みても解る如に、宗教界も、學界も、實業界も、政治界も、自分等の意識せぬ間に種々の轉換推移があつた。西南役があつた、憲法が發布された日露戦役が起きた北清事變に遭遇した、日露の戦役となつた。かうした大變調を一期として國民思想史を繰て見る。更に近く閥族打破憲政擁護なぞ幾多政界の動搖が等しく國民自覺の呼聲となつた。過去の日本は、現代と産むだ一本萬枝の規定に従つて當然來るべき結果が今現れたのだ。然し吾々の間には果して自覺があるだらうか吾々は社會の攻撃壓迫からソツと逃げようとはせなかつたらうか附和雷同を以て社會的と思はなかつたらうか。現在我々の取扱つてゐる學究や信仰が自己と奈何の交渉あるかと考へて見ねばならぬ。我々は

宗學や信仰を玩弄視し、高遠を喜び、不至を貴としなかつたらうか。人に就て謂ふよりか、自分は自分に就て語りた。自分の事は自分でやるといふ言葉は決して新しくない随分幼少の時から聞かされたそして耳に残り得ぬ程慣れてゐる自覺奮勵などと古い言葉ではないか、然し自分は此の語の前には反拒の勇もなく疑視する力もない程弱者である。自分等の取扱つてゐる問題は常に自己に關係し社會を背景としておらねばならぬ。社會を背景とした我々は社會と没交渉であり、自我と無關係の事を奈何に論究しても畢竟暇人の暇つぶしであるからだ。かう謂つたら自分を破壊的と云ふかも知らぬ。然しそれは自分を理解してくれぬ、盲評である、自分は宗門の凡に輿論なるものゝ存在を認め得ない、輿論がないのか、輿論發表の機關がないのか、否彼等は自分を考へてゐるだらうか自分は國民自覺の呼聲を聞く毎に宗界の反響奈何を注意した我々はあの大勢を漫然觀過しなかつた、自意識のない宗教界を思ふすら苦痛ではないか。自分の問題に熱中し得る人は當所輿論を造らねばならぬ。我々は迂迴の爾前經を捨て、

直達の今經を頂ている、薄縁の佛を去つて親縁の佛に結ばれた、難道を簡んで易道に導かれた。是の喜び、此の大恩を思ふなら速時自己の問題に接觸する、吾々は自分に尤も近く尤も親しく説かれたそれを、高く遠く疎にしながら遠て自己を陥れ社會と分離して來た。自分は先づ自分を呼び覺さねばならぬ。そして自分の問題を檢べねばならぬ。吾々の第一の義務は是以外に何もない、眞個自己を思ふ人に、何ぞ他を棄てたり、陥れたりし得やうや、救濟は自己より初まるのである。自己の救濟が同時に他の救濟である『一人の成佛は一切衆生の成佛』とは是れである。徒に他に煩はさるゝ

人格中心の研究法

一、矛盾の生活 吾々の思想と實生活とは常に二元的の傾向を帯びてゐる。吾々はそれが何よりも苦痛で堪へられない。一方には頭の中に神を慕ひ、信仰を求め、道徳を思ふ。けれどもそれが一として實生活に表現された例がない。却つて吾々の實生活は、その時々々の衝動に左右せられて、間々思はぬ行爲を敢てして

より吾々は先づ自己と解決せねばならぬ。そして自己に尤も親しい相應しい何者かを握らねばならぬ。それあつて後、生ある宗教と宗學とか發生するのである。我祖の教も我の問題から初まつた『而に日蓮は日本國安房國と申國に生じて候しが、民の家より出で、頭をそり袈裟をきたり此度いかにもして佛種をも植へ生死を離るゝ身ごならんと思ひ候し程に云云』とは、千古不磨の妙文ではないか。此所聖誕の賀筵に近て自分はかうした深い強い感を得た。そして中心から喜に満された。嗚呼あの御艸庵殿として見そなはず常在殿!!!

白 風

おるのである。又それと反對に、他方には淳々として人に向つて神を説き、信仰を勧め、道徳を示す。けれどもそれが必ずしも衷心からの思想の表現ではない。却つて吾々の頭は往々にして如何に物欲を充たすべきかに就て満されてゐる時が多い。如慙く吾々の思想と實生活とは、常に矛盾しておるのである。恐らくこれ

は有史以來誰れでも自分を知つた時、最初に感じた問題であつて、而かも亦未解決のまゝ、最後まで残つた問題であらうと思ふ。けれども吾々はどうしても此問題を、未解決のまゝ最後まで残しておくとは出来ぬ。何故ならば、此問題の残つてゐる限り、吾々は折にふれ事に従つてその矛盾に泣かねばならぬからである。

殊に吾々の如き形式的生活を送るものには、公然と二元的生活を送るとの出来ぬため、衝動欲を無理に壓迫して、純潔なる思想の表現的生活を送るかの如く装ふことがある。けれども其等の物欲は、不識の間、間々内酔して終には神、信仰、道徳等に關する純潔なる思想をも化膿し、最後にはそれが全生活の上に破裂して根底より自己を汚がすがすがしいとも限らぬ。こふいふ意味からしても、此問題は是非解決しておかねばならぬ問題である。

二、その原因 如愆き二元的生活の依つて來る所以には色々の原因があるであらう。或は意志の薄弱なるに依るもの、或は生理的の欠陥より來るもの、或は四圍の境遇に餘儀なくさるゝもの等それである。けれども今吾々は、殆んど吾々の前半生の總てであつた思想的生活の方面から、その原因を探つてみたいと思ふ。

吾々は先づ第一吾々自身に向つて問ふてみねばならぬところがある。それは何かと云ふに、吾々の今迄の研究方針は果して正鵠を得たものであつたかどうかといふとこれである。併かし吾々は不幸にして之に否と答へねばならぬ。何故ならば、吾々の今迄の研究方針は、唯だ學問の爲めの學問であつて、徒らに思想から思想へと涉り歩いたに過ぎぬからである。そして其間最後の目的に價ひする其大思想家の人格にまで深く突き入る處がなかつた。例へば天台大師の教學を研究する時、玄文の二部には十年の歳月を費しても、止觀の研究には、僅かに一二年の時をしかかさぬといふ有様であつた。然るに大師の全人格は、却つてその止觀に眞面目を顯しておるのではあるまいか。吾々の研究はそれを知りつゝ閑却してゐた。又祖書研究に之を見る時は、成程多くの學者は直に本尊鈔にゆく、けれどもその本尊鈔の研究は、徒らに註書の爲めに煩ひされて、その結果註書の面影に祖師の大人格は間々隠されてしまつた憾みがある。従つて吾々は直に祖師の大人格に接することが困難であつた。思ふに總て物事は人格と人格との接觸によつて、そこに新しい力が生れてくる。吾々は實にその力が欲しいのである。その方によつて自己

の小人格を高め、實生活を統一してゆきたいと熱望しておるものである。然るに吾々の今迄の研究方針は、徒らに思想の取り扱ひにのみ孜々として、更に進んでその奥に閃いてをる人格の面前にまでハタと突き進むことを忘れてゐた。こんな事では、よし百年勉強してもそれは單に物識りと云ふに止まつて、人間としての自分には何等の交渉をも持たぬものになつてしまふ。偉人の人格を宿さぬ思想が、いくら頭の中にあつても、それに表現力のないのは、寧ろ當然のことではあるまいか。こふいふ無意義な研究の續く限り、吾々は永久思想と實生活との二元的矛盾に苦しまねばならぬ。

三、吾々の採るべき道 如慙き二元的矛盾の調和を計るには、たゞ向後の研究的態度を、人格中心的研究的態度に改むるより外はない。換言すれば、祖書を忘れて註者の義論に囚はるゝ純思弁的態度から脱却して直に祖意を衝き、祖師の大人格に迫るゝ積極的研究の方法を採らねばならぬ。この意味に於て吾々は、混濁たる時代の吾學界に向つてこう叫びたい。曰く、汝若し統一ある一元的生活を送らうとするならば、何等の條件なく、直に祖文に歸れ、そして更に復た法華經に歸れど。祖文に歸り法華經に歸つて専心釋迦及び祖

師の大人格に衝き入る時、吾々の研究には初めて釋迦及び祖師の生命を宿すことが出来る。この生命ある思想によつて表現せられた實生活こそ、眞に思想と何等の矛盾なき實生活となるのである。此時吾々の思想と實生活とは、不離の關係を結んで、一は吾々自身の人格の内容となり、他はその外形となつて、茲に吾々は統一ある人格を得て矛盾なき一元的生活を送ることが出来る。人格中心の研究！これ吾々の採るべき唯一つの新路である。

四、眞の宗教的生活 この方法によつて進む時、少くとも自分一個の全生活には、何等の矛盾も無いことになる。けれども社會は果してこの生活を認むるか如何うか、それを社會に訪ふてみる必要がある。若し社會がこの生活（或は社會に逆行する時もあらう）を、充分價值あるものとして尊敬するならば、此時吾々の全生活は、個人的にも社會的にも完全した、眞の宗教的生活となり得るのである。



救ひのみこゑ

駄 諫 生

柳營創設の當時、唯自力を専らとする偏執家の幢を樹立し、威氣揚々として行く者あり。又唯他力を標榜して、稱名に餘念なく過ぐるものあり。而も道すがら衆に語つて曰く、心中孤獨なる者は來れ、西方の如來は汝等の欲求に應せんとす、須らく專念なるべしと。他は又曰く、衆人よ、禪を凝して我が心を觀せよ、何物かそこに閃くものあらん、是れ即ち眞の得悟なりと相共に東柳營に足を留めんとす。未だ幾許ならずして天の一方に雷電鳴り、大地俄然震動しぬ。兩人呆氣にとられ度膽を抜く。見れば、忽然一聖僧の地上に立てるあり。威儀端正にして溫容迫らず、笑を浮べ徐ろに彼等に語つて曰く、汝等の欲求する所は總て誤れり、悉く迷へり。今汝等の爲に、尤も簡捷にして、最も安全なる方法を示さん。刮目して見、善く之を心田に記せよ。汝が專念を轉じて、我等の主師親たる久遠本佛釋尊に歸し、唱題妙行に依つて已心の佛性を喚起せよ。然れば直に本佛の靈體と一如することを得ん。こゝに於てか、本佛所証の因果の二法は直ちに汝が一法となるべきなり。然るに汝等の一人は濫りに無縁の他佛を

翹望して、徒らに本時の娑婆を厭離し、空しく如幻の樂土を夢み、又他の一人は自己陰妄の一念に依りて叨りに無上の覺体を律せんとし、僞空觀の床に惰眠を貪り、水中の虛月に心を勞して、而も一物を得ず、自ら高擧の心を抱いて已れ佛に等しと謂ふ。共に迷ひ共に狂へり。譬へば狂子の如く窮子の如きか。早く來つて色香味美の良藥を嘗めよ。而らば無始の三毒は忽ちに消除して、本有三佛の尊顏に接せん。早く來つて汝が父たる本佛の居城を訪へ。父は慈顏笑を浮べて汝に家業を讓與すべし。汝等之に氣付かずして徒らに貧里に迷ひ、良藥を捨つるは何ぞや。本佛の大慈悲に泣かざるか。無始以來汝等の爲に救の御手を垂れ給ふを知らざるか。救の繩に取り付きたる時、直に汝等所藏の佛知見は開示され、迷妄は忽にして除かれ、眞の解脱は茲に得るなれ。經には是人於佛道決定無有疑と説けり兩者共に來つて疾く我が門に集るべし。何をか疑ひ何をか危ぶむと、縷々論し給ふ所あれば、彼等が迷妄の霜露は、この赫々たる慧日の光りに依りて悉く消除せるを余は見たり。あゝ尊いかな救ひの御聲よ。

椿の花

△ 生

暖かく又いと閑なる日の事なりき。二三の信者を案内して今は昔の物語りなどしつゝ、苦蒸す老松の間縫ひ登りて漸く圓光庵の境内に着く。庵は四季の眺望に富むを以て名あり。庵主の請するまゝ椽に腰打かけて澁茶に喉を濕しながら遠く前方を見遣れば、遠近の山々には棚引く霞の濃く薄く天の一方に天子嶽の連山重疊して南方に展じ脚下には富士川の碧流廻りて白蛇のうねるか如く。光景雄絶真に大虚に遊ふ心知して、一行の喜び限りなし、眼を轉じて右方を眺むれば境内の中央に攢かれる大杏樹の間より雪に輝やく七面山頂の日影神々しく、樵の振ふ斧の音に杏樹の葉の二片三片ホロ／＼と舞落つ様など晝趣盡きざるものあり。やがて庵主の案内に任せ、堂宇をめくり見れば石垣にて圍まれたる瀟洒なる地に青銅にて、造れる二基の碑立てり。庵主は先づ合掌して、さて徐ろに語るやう。その昔江戸の旗本に永見重廣と云ふものありて、二子を有せり。兄は十六にして重吉と云ひ弟は十五にして重尙と云ふ。父兄の病弱なるを憂へて窃かに弟をして相續せしめんと議る。重尙之を聞いて、大に驚きその不

法を再三父に説けども遂に用ひられずして自刃す。重吉之を見て深く弟の義死を哀み、屍を抱て歎くこと限りなし。日夜に亡弟を慕うて忘るゝ能ず。生きて父母に事へんか、死して弟に見へんかと。煩悶遂に弟の跡を逐うて又自殺したり。父母悲歎やるかたなく其遺骨を携て遙々この身延の山に詣でしかば、時の法主日蓮上人深く兄弟の義死に感じ哀み給ふて、此處に塔を建立したるなりと。語り終りて庵主は密かに涙を拭ぐへり。一同も此の哀れなる物語りに思はず涙を、さそはれて、題目唱へつゝ木の枝、又は花などを手向けながら是人於佛道決定無有疑と回向せり。余はその慕側に爰ける二輪の椿の花を取りて兄弟に擬し一同を促して歸途に就けり。

なつかしの弟したうて行く兄の

心の内をおもひやらるゝ

徴兵に出る友に與ふ

山内 慧戒

灰かに聞くに、吾兄今回徴兵検査に合格の榮を蒙れり。爲國歡喜に堪はず。筆を呵して 書を呈する所

以なり。思ふに軍人なるものは明治十五年軍人に賜ひし勅諭にも見ゆるが如く、自ら陛下の股肱を以つて任ずるの覺悟なかる可からず。故に一旦入營の曉は常に國家を護り皇威を發揚せん事を心掛け、誠心誠意不惜生命の奉公ある可きなり。特に勅諭の五ヶ條は軍人生活の生命をなすものなれば、能く之を服膺して、決して違反の行爲ある可からず。五ヶ條とは他なし即ち忠節、禮義、武勇、信義、質素、是なり。入營後直に上官より教を受る事なれば今更の贅辨を要せずと雖。古語に『三歳の童子も之を知る、而も八十歳の老翁終に行ふ能はず』の憾みなからしめんのみ。歐洲にては一ト度徴兵に出たる者にあらざれば、世人の信用を得る事能はずと。之一ト度軍隊に入りたる者は其舉止動作を始め、氣風思想悉く高尚確實の人と爲り之を軍隊前に比すれば殆ど別人の如き觀あればなり、外國に於てすら斯くの如し。況や我帝國軍人は世界無比の皇室を戴き世界無二の國家を保護する任務あるに於てをや宜しく忠良確實の人となり以つて、大元帥陛下の股肱の一人たるに愧づる事なからんことを期すべきなり好漢幸に健在なれ。

我が國旗 辻 能學

何れの國に於ても、國旗はよく其國の歴史、性質等を説明するに足るものあり。見よ、十字架は英國の國旗にして青白紅の三色なるは佛國、幾條の横線に數個の星を添へたるは米國、露國は鷲、支那は黃龍、暹羅は象、波斯は獅子、土耳其埃及は月の缺けたるを描けり。されども此等は皆遂に我國旗の光明ある、又圓滿なる表象に比す可からず。即ち龍は髯こそいかめしけれ又象、獅子は體こそ大にして猛なれども皆是れ獸類にして已に其國の天下に事を成さざるを示せるなり。然るに見よ、我日章旗の、その白地なるは潔白を表し中央の赤色なるは赤心を示し、その圓形なるは君臣相和の相を表することを。これ即ち我國の精華にして過去に於ては三千年來の名譽ある歴史を語ると共に、又未來に於ては四海統一の大業を成就すべき事を表すものと云ふ可きなり。

雪中の竹 望月 宗康

朝から手足の痺れるほど寒い日であつた。空は薄墨

を流した如く層雲四面を鎖して、續く連出はものすごく雪煙に掩れていた。白皚々たる七面山の降雪を打ち來る風が刺すやうに身に沁みる。私は課業後用足しに町へ下つたが、其時は早や里にも雪は散る花の如くに降り出してゐた。それが用事をすまして歸へる頃にはもう五六分ほども積つて、歩行にもやゝ困難を感じる位であつた。私は喘ぎ／＼坂を中程まで登つて來た。そしてホツと白い息を吐きながらフト路傍を見ると、五六本の竹が降り積む雪に頭を低く地に垂れてゐる。其風情が一きは私の目に、物あはれに映つた。そしていかに彼が忍力の堅固なると精神の廉潔なるかを思はずにはゐられなかつた。見よ彼が、この降り積む雪に平常の如く直立してゐたならば彼は必らず中途に於て折斷せねばならなかつたであらう。然るに彼は雪の襲ふに任かせて少しも抵抗せず、忍びに忍んで然して尙うなだれてまでも忍んで居る。あゝ彼は何故にかくまで苦しめられつゝ、而かも平然として居るのであらうか。之れ他事なし。後に於て大に伸びんが爲である。實にゆかしい風情ではあるまいか。をりしもひどく唱題の法鼓に、端なくも思ひ出さるゝは六百有餘年前の昔である。頃は文永八年九月十二日、聖祖大人松葉

ヶ谷に於て説法の真最中、物具着けたる嚴めしき數百人の武士に圍まれて、身に罵詈讕謔を俗びながらも、「日蓮是を見て思ふ様、日來月來思ひ儲けたりつる事は是れなり。幸なる哉、法華經のために身を捨ん事よ、臭き頭を削なたれなば、沙に金を替へ石に玉をあきなへるが如し」と述べ玉ひて、彼等の思ひの儘に縛につきそれより鎌倉の大路小路を引きまはされて、龍の口の刑場に臨むも、蛇頭丸の名劔の下莞爾として弟子祖那等を顧みて曰く、『各々殿原これほどの喜をはらへよかし』と、嗚呼違なるかな吾祖大人、如斯く匹夫等に刃杖を加へらるゝも、尙且つ忍のびに忍んで而かも泰然自若たる、之れ實に佐島に於て大いに伸びんが爲ではあるまいか。かく思ひ來れば、これら五六の竹にも言ひ知れぬ、なつかしさを覺て、私は思はず、『汝の未來を自重せよ』と小言に彼を慰めたのである。時しも告げ渡たる夕暮の鐘に驚かされて我に歸れば傘の雪重く、手足はひへて冰のやう、漸く迫り來る夜の色に包まれながら雪の夕ぐれ物さびしく、再び登つて私は歸途に就いた。

吾人の目的 市川 是温

凡そ人は食はんが爲に生れたるにあらず。食は唯だ滋養の爲なり。又遊ぶんが爲に生れたるにもあらず。遊ぶは唯だ身体の調節を計らんが爲のみ。然らば人は何の爲めに生れたるか。

曰く活動せんが爲めなり。活動とは何ぞ、地を耕作するも、製造業に従事するも、學理を研究するも、皆活動なり。然れ共活動には種々あり。楠木正成も足利尊氏も共に武將として活動せしも、其の目的價値に到りては雲泥の差あり。然らば吾人は如何なる活動をなすべきか。曰く、自行先づ成りたる曉は、二陣三陣聖祖の御あごを慕ひて、不惜身命の行を遂げ、婆娑即寂光の實を擧げんこと、これ即ち吾人の目的なり。

日記帳より

H 生

○ ……私はお前（自分のこと）の貧しい姿を見るにつけ、時々目に冷たい涙の滲むことがある。お前にどつては今が一番大事の時だ。精神的に墮落するのも向

上するのも、死ぬるも生きるも、一生涯にとつてお前の現在が一番大事の時だ——。

○ お前のその痛々しい姿は何だ。殆んど自我を認めることの出来ぬ程瘼せこけてゐるではないか。お前には過去を統一し、現在を努力し、未來を開拓する丈けの力が無いのだらうか。そして益自我を發展し擴大することが出来ぬだらうか。さて哀れなるお前よ！

○ 二三日前の暴風雨も忘れたやうに拭はれて、空は少女の瞳のやうに碧く澄み切つてゐる。刺すやうな日光が、草や木に反射してキラ、目に泌みる。けれども最う秋だ。恁ふして家の中に居ても、ソヨ、訪れる風が何となく緊まつて、自ら襟をかき合せたくなる。私は机に齋れながら、庭に植つてゐる萬兩の赤い實を忙然り見詰めて、考へるともなくお前のことを考へ續けてゐる。

私はこんなことを思つたよ。お前にはチツトも力がない。従つて見識と云ふものが皆無だ。人間が生きて行くのに、力が無かつたり、見識に欠けたりしてゐる位哀れなものはない。お前も最ういゝ歳じやないか。

少しは自分と云ふものも考へて見るがよい。一体前前は過去に於て懈け過ぎた。現在に於ても亦懈け勝ちである。だから幾ら學び得ても、後から／＼消れてしまつた。出来かけた自我も後から／＼放散してしまつたそれが爲めお前は肥わることが出来ぬのだ。今からでもいゝ、緊陣一番、貧しいながらも今迄の學事を纏めて、確乎たる獨立した自我を建設して見るがよい。そしてそれが出来たなら、小康に安んぜず、讀み且つ考へて、益その自我の増大を計るやう、不斷の努力を加へて行くがよい。そうしたならば、丁度苔菜へ海苔がつくやうに、段々お前の自我は肥わてゆく。見識も力も出来やうと云ふものだ……。

○ 前本の本箱には、餘り珍らしい本も見當らぬが、そして澤山あると思はぬが、それさへも前は半分も目を通してはゐるまい。よし目を通してものでも、せめて十分の一も覺わてゐやしまい。何も文字通り覺わてゐる必要もないが、その文意を取り、且つそれに依つて幾らか自我發展の資に供したものがあるか。前は唯だ漫然と中心無しに讀んでゐた。それ故讀んでゐる間は頭に映つてゐるが、讀み了ると何も残つてゐま

い。丁度活動寫眞の白布のやうなものである。堅實りしなくちやいけない。そんなことでは、私はお前と絶縁するかも知れないよ……。

淋しい身延

岡 觀 孝

庭の山茶花が白く咲いて、昨日迄美しく咲き揃ふて居た黄菊が、皆力なく倒れてしまつた。隣の垣根の水仙は未だ蕾である。今朝起きて見ると手水鉢に薄ひ氷が張つて、七面山の頂が眞白になつてゐる。霜が降り風が吹き、氷が張つて此身延にも淋しい冬が來た。それはある寒い日であつた。

私は日影をなつかしみながら、ぶら／＼と裏の林に午後の半日を遊び暮した。強い朝日がキラ／＼として新緑があたり匂ふた夏の林と違つて、今は見る影もなく瘦せてしまつた。葉の無い淋しい影が僅かに弱い日を受けて、淡く地上に落ちてゐるばかり……。彼方の田の面を見れば、鳴子の繩も切れて、笠の破れた案山子が寂しく立つて居る。鶺鴒が來てそのそばに尾を振つて居るのも、何となく物哀れである。脚元には露深い叢に妙音を弄したあの秋虫の聲ももう、絶わて

しまつて、褐色の落葉がガサ／＼と冷たい風に泣いて居る。空を見ると雲さへ、急しげに北へ／＼と走つて冬が來たと告げてる様に思はれる。

夕暮の鐘が鳴つた。

柿の枯枝に友も無く止まつて居た鳥が、その音に驚いて當てもなく舞つて往く。熱い涙が理けもなく私の頬を傳つた。

私はやがて踵を返へして自分の部屋に歸つた。そして外を眺めた。

夜の景色は段々濃くなつて、表の鐘樓は次第に闇の中に消えてしまつた。どあなたの空に冷たい星が一つ薄く光つて居る。寒くなつて食ふものが無いのであらう、鼻の聲がする。

夜は更けて往く。障子の穴から吹き込む風に私は幾度襟元を掻き合わせたかわからない。

八時が鳴つた。棟を隔てゝ打つ、お引けの飯木の音が微かに聞けて來る……………。

雨後の秋

黒 簀 學 勇

夜來の雨は晴れたる儘、二三の友を語らひて寺平の

畑道にと歩を運べば、秋をかこつ出の音は、怨むが如く、悲む如く、草葉の露は冷々と衣の裾を潤して一步毎に哀を増せり。見渡す限り四方は一面濃霧に鎖さるゝとはいへ、或は現れ或は隠れ、變幻万狀一呼吸の中に新なり。既にして冷風吹き起れば、濃霧忽ちに散して、満山盡く是れ紅葉、誠に身延山の栖は千早拂る神もめぐみを垂れ、天下りましますらん、心なきしづの男しづの女までも心を留むべし。哀を催す秋の暮には草の庵に露深く（中畧）峯の紅葉。何時しか色深くして、たへ／＼に傳ふ懸樋の水に影をうつせば、名にしおふ龍田河の水上也かくやと疑はれぬ』の聖文、いつしか口をついて誦しつゝあり。友を促がして歩を山麓に移せば、溪水秋に染みて紅なり。互に相顧みて盡ざる書趣を賞す。

布教の心懸け

友 井 能 慈

吾人は佛弟子なり。佛弟子は佛祖の本意を受け、惡を止めて善を進め、權を實とする迷者をして實道に引入し、以つて天下萬民諸乘一佛乘の春を迎ふべき大責任あり。吾人は如何に心掛けて布教せば、皆歸妙法の春

を迎ふべきや。吾人毎に云ふ。學問辯論成就せば、破權門理の旗を擧げ、皆歸妙法の春を迎へんと。實に然なり。されど今の世を見るに布教にて改宗せしもの未だ一人としてあるを聽かず。之れ如何なる理由に依るや。學問辯論成就の上、如何に布教すども、吾人の言を信じて、本化の直道に歸する者なき時は、布教の功何れにかある。皆歸妙法の實何れの時をか期すべき。吾人深く憂となす。思ふに當世の布教は第一の目的たる衆生化益の本意を捨て、謝儀の多少を以つて本意となす。布教師は先づ謝儀の多少を問ひ、而して後謝儀多ければ欣然として招きに應じ、謝儀少なきと聽いては動せざること須彌山の如し。あゝ吾人は謝儀を目的として布教すべきか。衆生化益を目的として布教すべきか。若し謝儀を以て目的とするならば吾人は大にそれを痛せん。衣を着たる猫なりと。但に吾人のみならず三世の諸佛も亦吾人の如く痛し玉ふべし。故に吾人は須く卑しき心を捨て、大慈悲心に住し、以つて真心より布教の功を收むべきなり。されば必ず萬民は水の流るゝが如く吾法に歸せん。若し夫れ逆誘の者あらば、宜しく權實二教の戰を起して其の起盡を正し、彼等の迷曠を仆して淳々説示する處あるべし。吾祖建長

五年の夏の頃、始めて本地難思の妙法を弘通し玉へるに、初めは一人二人一村一郡、はては日本國の一切衆生皆吾祖の敵となる。然れども結句妙法に歸する者幾十萬の多きに至りしは何ぞや。一に吾祖の慈悲廣大の德に依るなり。此を以て知る今の世布教の功なきは唯だ説者の胸中謝儀のみありて、赤心よりほごばしる慈悲の念に飲けたることを。従つて聽衆に感動を與へざる所以なり。乞ふ深く之を思へ。

海

伊藤 海聞

吾々學生には暑中休暇が一番楽しい。或は山に、或は海に、或は慕しい父母の膝下に、何れも思い／＼に此三句を費すのである。自分は二句を旅行に、一句を堺の海岸に送た。山に計り居て、海と云ふ物に對して物珍しい自分は、海岸の生活が心ゆくばかり嬉しかつた。泳ぎを心得ぬ故、別段海へ這入らうとは思はぬ。只石の上に立つて、絶えず果しも無き大海原から、大うねりにうねつて來ては、巖に碎ける波の壯觀を見るのが、何より樂しかつた。そうして何時も斯んな考を持た。偉大なる事海の如きは無いであらう。其面積は

地球の三分の二を占め、其深き處は三萬尺にも達すと
 か。表には數萬の船舶を浮べ、底には數十萬の動植物
 を棲ましめてゐる。又壯快なる事海の如きは無いであ
 らう。靜なる時は水天一色、恰も瑠璃の如く、天津乙
 女の降り來て浴みもすべきに、一度怒れば狂瀾天を捲
 き、怒濤山の如く、大艦巨舶と雖も木の葉の如く掀翻
 するのである。又靈妙なる事海に如きものは無いであ
 らう。千萬年の昔から千萬年の後に亘て、萬川を懷に
 入れて溢れず、太陽に照されて滅せず、常に瑠璃を湛
 へて居る。此美妙なる壯快なる偉大なる大海に面した
 小湊は、偉聖日蓮を生んた。怒濤岸を噛み狂瀾巖に迷
 ふ俎の危岩と、風寒く雪深き日本海の激浪に圍まれた
 佐渡ヶ島とは、聖日蓮をして勸持品の數々の二字を色
 讀せしめた。山碧く海濶き龍ノ口は、聖日蓮をして本
 地を開顯せしめた。『法華經は川流江河等一切の水を一
 滴も漏さぬ大海也』とは、聖日蓮が絶大の妙法を贊じ
 た金句である。『我日本の大船とらん』と、是れ生死
 の大海に苦む衆生を涅槃の彼岸に引入れんとし給ふ聖
 日蓮の至誠なる悲願である。『四海豈兩主あらんや』と
 は聖日蓮が我曹に娑婆の救主を示された好箇の比喩で
 ある。『譬如一切川流乃海爲第一』此法華經最爲深大

とは、八萬四千の法門七千餘卷の經典の心髓を定め給
 ひし釋尊の金言である。『一天四海皆歸妙法』とは是れ
 釋尊の本懷我祖の悲願である。我は今海に向て靜に法
 華經の絶大と、我祖の恩徳とを思つた。然して法華經
 の微妙を讚美し、我祖の恩徳を讚歎する時、大に海を
 も誦ふべきである事を知つた。鞞鞞たる潮の音は之れ
 唱題の聲、澎湃たる波濤は之れ折伏の狀、壯麗太古の
 雄姿は之れ久遠の境界を默示してをるのである。嗚呼
 壯なる哉海よ。美なる哉海よと、旬日滯在中、海に向
 つて立つ毎に斯んな感じが繰り返された。然して自分
 は海を愛し海に親む一人となつた。而して又我海國民
 の全躰をも、海を愛し海に親む人と爲し度く思つた。



○運

長閑なる、
里道の、
來し方を、
われは泣きぬ。
ふと見れば、
縁缺けし、
ちりあくた、
ふくふくと、
あはれとと。
おと腕よ!!
聞かまほし、
思ひ見る、
人の家の、
暖き、
家人に、
新玉の、
平和なる、
響應の、
低き鼻、
歡樂の、
ひたすらに、
華かに、
あふ、さるを、

命

荒木 經明

小春日和や、
土橋に立ちて、
思ひつゞけつ。
浮きつ沈みつ、
腕の死骸、
背に被りて、
流れ來りぬ。
見るも無殘、
汝が歴史を。
『汝も昔は、
光る座敷に、
慈愛を受けて、
愛でられつらん、
年の始や、
村祭りには、
華と成りてぞ、
蠢かしつ。
密に憧憬れ、
幸を誇りて、
生を送りき。』
今の姿は……、

われは泣きぬ。
さはれ、汝、
春宵の、
知らずや……。

叫べども、
孤影淋しく、
搖ぐよと、
草蔭に、
吁汝よ、
實に實に、
心なき、
犖猛き威を、
況てや、
うへなりと、
川の面見つめつ……。

知らずや……。

知らずや……。

知らずや……。

知らずや……。

○銀 世界

堇つみにし野邊や此處、
黄金の色にはこりたる、
甫公英いつか白銀の、
臺となりて残りたり、
螢たづねし岸や此處、
玉と亂れしその光り、

知るや榮は、
夢的一幕、

いらへがもせで、
下へ下へ……。

見ねし瞬間!!
姿隠しぬ。

いづちゆくらん、
運命の神は、
器を翻弄びて、
擅にす、
靈の人のや、
われは涕きけり。

あへなく消れて今ははた、

八重の氷にとざされぬ。

紅葉染めにし山や此處、

錦とばかり見まがひし、

色消ねはてゝ北風に、

散りて亂るゝ六つの花。

今白妙の世に立ちて、

過ぎ來し方を偲ぶ時、

み空に高き月影は、

物凄き迄さへ渡る。」

和歌

夕暮れの御堂の前に童べひとり

何願ふらん額づきてぬぬ

溝田 在庵

身と心直く正しく持てよかし

社の前の杉の如くに

師子吼道人

漢詩

新 春

鷄鳴報曉一天新。

四海東風聖恩遍。

秋郊晚歸

黃菊丹楓照眼清。

回頭酒旆隱林遠。

迎 春

送臘迎春曙色新。

拜年客去閑無事。

竹 鶯

瑞氣氤氳萬象春。

椒杯獻壽太平民。

全

夕陽幽徑一禽鳴。

好趁歸雲杖履輕。

天 香

學家獻等酌芳醇。

早有明窓試筆人。

俳句

白梅や今日庵主の不在にして

茶に酔ふて寝られぬ宵や春の雨

春雨や今日も隠居の謠かな

瓦斯營の朦朧として春の雨

春雨やお次ぎに釜のたぎる音

雑談に女もまじる春の雨

○

うつし世のそのひと時を澁茶かな

鶴

閑

同窓會々報

去年の秋、天長の佳辰を卜して發會式を舉げて以來、日尚ほ淺きに拘はらず、我會は三部共着々其歩を進めて、諸般の設備もや、完全し、現今では其形式に於て、どうやら不足を告げぬ位の程度までには整ふた。幸ひに、内には會員相互の努力と、外には特別縁者諸師の援助とによつて、更に内容の充實と發展とを計ることを得れば満足である。

●祖山學院同窓會々則

- 第壹條 本會ハ舊燈耀會ヲ祖山學院同窓會ト改稱ス
- 第貳條 本會ハ祖山學院内ニ設立ス
- 第參條 本會ハ異体同心ノ祖訓ヲ奉シ會員相互ノ親睦ヲ謀リ三業ノ調節的發展ヲ期スルヲ以テ目的トス
- 第四條 本會ハ左ノ會員ヲ以テ組織ス
 - 一、名譽會員 本學院ト特別關係ヲ有スル者及ビ本學院ニ教職員タリシ者ヲ以テス
 - 二、特別會員 本學院現教職員及ビ本學院出身者ヲ以テス
 - 三、通常會員 本學院在學生ヲ以テス

第五條 本會ハ前掲ノ目的ヲ貫徹セシガ爲左ノ諸部ヲ設ク

- 一、講演部
- 一、文學部
- 一、運動部

但シ各部ノ規定ハ細則ニ規約ス

第六條 本會ハ會務整理事業發展ノ爲左ノ役員ヲ置ク

- 一、會長 一名 院長ヲ推戴ス
- 一、副會長 一名 教頭ヲ推戴ス
- 一、會計顧問 一名 本學監事ヲ推戴ス
- 一、部 長 各一名 會長指定ノ教職員ヲ推戴ス
- 一、幹事 四名 在學生中ヨリ撰舉シ内一名ハ會計ヲ專任ス

第七條 會長ハ會務ヲ總攬シ、副會長ハ會長ヲ輔佐シテ其ノ本會ノ統一發展ヲ畫策スルモノトス、會計顧問ハ本會會計事務ノ指導及ビ利財ノ保管ニ任ズルモノニシテ、部長ハ各部ノ整理發達指導ノ任ニ當ルモノトス、幹事及ビ會計ハ直接會ノ事務ヲ擔任シ會務及ビ事業ニ流滯ナカラシムベシ

第八條 本會ハ毎年四月ニ大會ヲ開キ幹事ノ改選ヲ行ヒ其任期ヲ滿一ケ年トス

但シ再選スルヲ得

第一項 幹事ハ通常會員ノ互撰ニヨリテ決定ス

第二項 幹事ハ高等部ヨリ二名、中等部三年生以上ヨリ二名ヲ互撰スルモノトス

第三項 投票ハ總テ記名投票トス

第九條 本會々員ハ左ノ金額ヲ納入スルモノトス

第一項 名譽會員及ヒ特別會員ハ隨宜寄附トス

第二項 通常會員ハ毎月金拾錢ヲ廿五日迄ニ會計ヘ納ムルモノトス

第三項 通常會員ハ新入會ノ時基礎金トシテ金貳拾錢ヲ納ムベキモノトス

第四條 本會ハ各自責任ヲ重シ無斷缺席怠慢ノ行爲ナキヲ誓フモノトス

第五條 本會ハ會員ニシテ全科卒業ノ際ハ送別會ヲ開キ且ツ相當ノ紀念品ヲ贈ルモノトス

第六條 本會々則ノ改正及ヒ重要事項ノ決議ハ大會ノ際出席會員ノ三分ノ二以上ノ協賛ヲ得ルモノトス

但シ緊急ノ場合ハ役員會議ニ依リ決定スルヲアルベシ

▲講演部

●三部動勢

△大正二年十二月廿三日より同廿九日迄一週

▲講演部

一、講演部

間、友井、早川の兩君、早川入り方面に幻燈布教を試む。遠近の善男女毎夜相誘ふて參集。法益無盡。

△大正三年一月八日。伊藤幹事映南伊沼村に布教。聽衆無慮三百名。滿堂心大歡喜の色に充つ。

△全一月卅一日。小林部長、友井、早川、望月(悉)の諸君、豊岡村青年團の招きに應じて、同村本妙寺に幻燈布教をなす。來集するもの二百名。説者の熱烈なる辯舌、聽者の強烈なる信仰と、兩蓋相應して法益無量。

△同三月一日。波木井村田實寺に於て、櫻島及東北地方内救濟の爲め幻燈布教開演。小林部長、伊藤幹事、友井、望月(悉)兩君出演。尙ほ深敬病院より山岡、小坂田兩君蓄音機を以つて來援。聽衆二百餘名。法雨普く潤ふ。

△此外院内に於ける練磨會は、毎週土曜の午後より開催され、回を重ねる毎に、益々盛況を呈しゆくこと、誠に爲宗欣賞に堪へぬ次第である。(k, i)

▲文學部

△文學部の事業としては、この「樓神」を發行すること夫れ自身が、唯一の事業である。吾部も會の發展と共に益膨張して、茲に今迄の體字版刷を改め、インクの匂い濃やかに新裝を擬して江湖に見ゆるに至つた。これは獨り我部我會の誇りのみならず、引いては宗門思想界に於ける誇りでもあらうと思はれる。

△表紙畫は秋葉蕭伯の蠶筆に成れるもの、その

の意匠の斬新且つ精細なる、永く「樓神」のシンボルとして大切にこれを續けて行きたいものである。

△二月十六日、聖誕日を期して、吾部は新たに俱樂部を設置し、之に宗内の諸雜誌は勿論、各宗の代表的雜誌及び世間二三の雜誌を備付け更に五六の新聞をも備付けて會員の思想發展に資することとした。その外、種々の計畫もあるが、それは漸次會の隆盛を俟つて實現することとする。(k, M)

▲運動部

紅葉が散つて七面山に雪が來た。これから段々寒くなると思つて居る中に、もう梅が綻びるその綻びた梅も今はあらかた散つてしまつて、巳に櫻の時期となつた。若い血潮が理もなく暖かい春風にそゞられる。今迄はさまでに思はなかつた部屋も、急に狭苦しく感ぜられて、何んぞなく戶外が戀しくなる。いよゝ運動のシーズンが來だのだ。

我部に於ては、特に此期を以つて、今回新たに遊動木を作り、更に又ブランコをも設けた。漸次時を得て弓術場をも新設し、進んではお道部をも設けたい考である。

かりに午後の日ざしの暖かい時、運動場を見舞ふならば、テニスコートのの上には、白いシャツを着た學生の群が、如何にも快活に嬉々として網を投げ交はしてゐる。金棒にも「リス」のやうな軽い運動が行はれてゐる。ブランコの半円を画いては高く低く振れる様、遊動木の長閑に

幽かな軌る音を立てながら波の如くに動く姿など、見るも心が躍つてくる。七十の健士が、鐵の如き肉身に宿す精神こそ、實に尊いものであるまいか。

付記、ブランコ用の鎖を、御寄附下されたを、惠善坊師に感謝いたします。

●降誕會記事

學院舉行の降誕會は例年學院師徒だけで奉祝したのであるが昨年からは内容外觀共に漸く出來かかつた同窓會の大希望によつて一大發展を試みることとなつた。本山役會の援助を得て漸く聖誕日の朝を迎ひたのである。公開講演、諸官衙各學校通知、有志案内、名譽職招待、各團體通知等がせまぎわになつて決定した。夫に各年級の教室裝飾、喫茶店、新聞縱覽所、凡てが數日間に整備された。幹事會員の熱心が學院空前の事業準備を完成したのである。

いよゝ當日になつた。降りそうな空が次第に晴天となつたも天の加賀である。午前は支院の來賓を待て本院の奉祝讀誦會があつた。午後零時半嚴肅なる法要が關本教頭の導師によつて舉行された。今迄コソリした機を得なかつた大客殿は初めて聖誕奉祝の道場として開公された。ここで一寸來會者の模様を語らして靈山治下の信徒は聖誕日を知らなかつた、實に意想外であつた宗門の一大祝日を知らずに居る信徒はただ此所ばかりでない、百万の信徒中聖誕祝日を知るは

極めて少数である、然し是の靈山の麓にもコソ
 な言を聞こつては思はなかつた、來會者の一人
 は「初めて御降誕日を知りました、是から毎年
 二月十六日を村の公休日として御祝したい」と
 云ふた、彼等の覺醒を讀するに共に彼等の永き
 無知を憐まらずにをられなかつた、是の一事長
 宗門信仰界を裏書してゐるのではなからうか……
 案内した多くは來てくれた、一時は満堂の好況
 であつた、そして靜肅に威儀正しく永い講演を
 謹聽してゐた、此は吾々のいたく満足した一事
 であつた。一時半振鈴と共に講演、開始された

一、開會之辭 野口學生

一、聖祖に對する世人の誤解に就て 伊藤學生

一、眞應之春 本學教授 小林是恭師

一、聖祖之慈悲 本學監事 中村是本師

一、一大偉人 一老 堀 日溫師

一、聖祖之御名 本學教頭 關本龍門師
 の順に各講師の登壇を得た、吾等の企ては極意
 に満たぬ点が多い唯會員一同奉祝の意志を了せ
 よと、野口學生に結た、現代思想界から發たれ
 た各種誤解の大体評を試み更に我祖の面目を畧
 述して伊藤學生は降壇した、小林教授は眞應の
 春の側面觀から説き起して現代思想の解剖を試
 み、轉じて聖祖研究の各部面を招介した、後爾後
 の着眼点を指示された、中村監事は引文博く議
 縱横に聖祖の慈悲の廣大無邊であつた事實を説
 きた、譬喩法義聽者をして思はず御草庵を想はし
 めた、堀日溫師が病軀をも厭はずに登壇された
 のは一同感謝した、師は慣れた態度で自由な辨

で世界宗教史中の大偉人を列舉し、その事業
 信仰教理の概要を紹介した後、金口校量の大標
 的に照して、一大偉人出現の日を奉祝するのだ
 と謂れた、最後に關本教頭は、時間切迫の故に
 構格だけを述べるに前記して再詮論に別趣の意
 義あるを示し、聖祖の御名が本宗教理に不遇の
 關係あるを説かうとせられたが時間都合で
 概論で終たのは一同の一大恨事であつた、五時
 に講演が終た、小林部長は閉會を宣すべく登壇
 した、そして一同起立萬歳三唱芽出度聖誕奉祝
 の終りを告げた。

是れから各年級の飾物に就いて述べやう、教場
 入口には「祝降誕」の額がアーチの縁に照應し
 て、ドウしても素通を許さない、入たスグ右手
 の筆蹟が飾附であつた天井には數百の萬國旗が
 四面交互に取りつけられた、アルパムヤ、スク
 ラツプアツクヤ、各種新聞雜誌を讀んでる人も
 あつた、向側の「中二」の教場は喫茶室にあてら
 れた、各種の招待者を満足せしめ種々な氣分の
 モウ／＼として昇たは此所であつた、雲や奈良
 を聞きながら、コーヒや菓子を得てホク／＼せ
 ん人はなかつた、此所で休息した後スグ後の教
 場へ入た、「中一」の教室が中一二の協議で
 蓮花が淵が手技よく作られた、蓮の葉の色がチ
 ト濃かつたのさ漁夫の怖しげな顔さが不似合で
 あつた、次に「中三」の教場へ進む、一面の雪、
 藁小屋覗ひよる武士、蓮臺野に等しき塚原三味
 堂だ、本年製作中の白濁であつた。然し聖祖の

容貌には賛成し得ない、阿佛さ對照して餘りに
 下品であつた、柱がひくく屋根が深すぎた、此
 所で足を反して喫茶所のさるから、ト／＼と
 二階に昇た、「中四」の旭ヶ嶽、玄題始唱の當
 時をしのばすに充分であつた、唯聖祖の小軀は
 種々の理由に制限されては是れだけだが是れで全
 くなかつた裝飾としては是れだけだが是れで全
 學生の心血を絞たのである、それが未見、無經
 験の企てとしては上々の出来であつたと思ふ、
 何等設備のない片田舎で顔一つ作るにも一々紙
 を集めたり糊ばりせねばならぬ苦心を察せれば
 ならぬ。誰れも是迄の好成績は寧ろ豫期してい
 なかつた奈何に學生の熱心が高調してたかを知
 り得るのである。此のために二日夜眠なかつ
 た學生も多かつた、かく知た我々は奈何に感字
 し感謝したであらう、來會の誰れもが讚美の語
 を發たぬはなかつた、中には塚原や、旭ヶ嶽に
 拜跪した信者もあつた、嗚呼何と貴い有難いこ
 事ではないか、美術眼や建築眼を以てしては何
 等の評價をもか得ない吾々の裝飾が、反てこ
 うした涙を求め得やうとは……、吾々は我々
 の技を誇るのではない、眞個我等信徒の純信に
 感動するのである、自分はフトこう思ふた、都
 の信者さ鄙の信者、都でかち得る涙さ、鄙でか
 ち得る涙吾々は純信な真心の涙を田夫野人に認
 め得たを喜だ、本年の裝飾から自分は次の提案
 を思附た今迄の聖祖傳は直系的に聖祖の一代を
 述べるのみであつて傍系的に側面的に聖祖の信
 徒を通じて聖祖が解でない否聖祖を通じた信徒
 が明かでない、寧ろ此の方面の企てをこつた聖

容貌には賛成し得ない、阿佛さ對照して餘りに
 下品であつた、柱がひくく屋根が深すぎた、此
 所で足を反して喫茶所のさるから、ト／＼と
 二階に昇た、「中四」の旭ヶ嶽、玄題始唱の當
 時をしのばすに充分であつた、唯聖祖の小軀は
 種々の理由に制限されては是れだけだが是れで全
 くなかつた裝飾としては是れだけだが是れで全
 學生の心血を絞たのである、それが未見、無經
 験の企てとしては上々の出来であつたと思ふ、
 何等設備のない片田舎で顔一つ作るにも一々紙
 を集めたり糊ばりせねばならぬ苦心を察せれば
 ならぬ。誰れも是迄の好成績は寧ろ豫期してい
 なかつた奈何に學生の熱心が高調してたかを知
 り得るのである。此のために二日夜眠なかつ
 た學生も多かつた、かく知た我々は奈何に感字
 し感謝したであらう、來會の誰れもが讚美の語
 を發たぬはなかつた、中には塚原や、旭ヶ嶽に
 拜跪した信者もあつた、嗚呼何と貴い有難いこ
 事ではないか、美術眼や建築眼を以てしては何
 等の評價をもか得ない吾々の裝飾が、反てこ
 うした涙を求め得やうとは……、吾々は我々
 の技を誇るのではない、眞個我等信徒の純信に
 感動するのである、自分はフトこう思ふた、都
 の信者さ鄙の信者、都でかち得る涙さ、鄙でか
 ち得る涙吾々は純信な真心の涙を田夫野人に認
 め得たを喜だ、本年の裝飾から自分は次の提案
 を思附た今迄の聖祖傳は直系的に聖祖の一代を
 述べるのみであつて傍系的に側面的に聖祖の信
 徒を通じて聖祖が解でない否聖祖を通じた信徒
 が明かでない、寧ろ此の方面の企てをこつた聖

日に教場裝飾に利用したならばと思ふた、是非
 こうした金が随所に起きまて欲しい。
 此れで日中の記事が終つたから、餘白を得て夜分
 の餘興を談らう、學生の慰勞會といふ名義で午
 后六時から學院内部だけの茶話會が法喜堂で開
 かれた。劇、演華節、手品等數番の催が發表さ
 れた、此の催が何時か町中に流布して立錫の
 餘地なき迄に集した、中には夜食持參芝居見
 にでも来た氣の人も多くあつた、入りきれぬ爲
 め空しく歸つたのも三分の一はあつた、非常の評
 判が町の人氣をあつめたと見えてドシ／＼推し
 かけて来た、會員はホウと酔つてしまつた、コッ
 ソリと師徒だけの慰勞茶話會が公開になつた、
 サア設備もないもない、ニツカ音楽で調子附た
 役者が柏手木につれて先づ土牢から開演した、
 柏手喝采の聲、頭を解くやうな笑聲は日中の勢
 氣を壓せんばかりであつた、堅い充實した氣分
 が夜の柔いフワリした流に調ふて十時に解散
 した。嗚呼觀樂の祝日よな!!! (Z、K生)

●金品寄贈者芳名 (前號續)

一金五拾錢也	全	鈴木善隆殿	一雜誌臘代尼園	古野實善殿	一金五圓也	本院
一金五拾錢也	全	鈴木善隆殿	一雜誌大崎學報	望月寬逸殿	一金五圓也	本院
一金五拾錢也	全	鈴木善隆殿	一雜誌我立杣	小松海淨殿	一金壹圓也	本院
一金五拾錢也	全	鈴木善隆殿	一雜誌臘代尼園	池上玄省殿	一金參圓也	本院
一金貳圓也	全	鈴木善隆殿	天長節祝儀	丸山海昇殿	一金貳圓也	本院
一金壹圓也	全	鈴木善隆殿	松島日靜殿	大乗坊殿	一金壹圓也	本院
一金壹圓也	全	鈴木善隆殿	覺林房殿	圓臺坊殿	一金壹圓也	本院
一金壹圓也	全	鈴木善隆殿	窪之房殿	端場坊殿	一金壹圓也	本院
一金壹圓也	全	鈴木善隆殿	清之房殿	花之坊殿	一金壹圓也	本院
一金五拾錢也	全	鈴木善隆殿	竹之房殿	葉山丈太郎殿	一金五拾錢也	本院
一金五拾錢也	全	鈴木善隆殿	鈴木善隆殿	圓光庵殿	一金五拾錢也	本院
				加藤龍法殿	一金五拾錢也	本院
				林藏坊殿	一金參拾錢也	本院
				智寂坊殿	一金參拾錢也	本院
				大善坊殿	一金參拾錢也	本院
				十如坊殿	一金貳拾錢也	本院
				原田見翁殿	一金五拾錢也	本院
				覺林房殿	一金五拾錢也	本院
				武田監督殿	一金貳拾錢也	本院
				本行坊殿	一金拾錢也	本院
				島智良殿		
				日蓮宗大學殿		
				天台宗中學殿		



(以下次號)

禁轉載

大正三年四月七日印刷
大正三年四月十日發行

山梨縣南巨摩郡身延山久遠寺

編輯人兼 青木見孝

山梨縣甲府市柳町十番地

印刷人 淺川友造

山梨縣甲府市三日町三番地

印刷所 合名會社淺川商店印刷部

山梨縣南巨摩郡身延山久遠寺

發行所 祖山學院同窓會

